

---

# An amateur detective in the train

寝村萬寺

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

An amateur detective in the train

### 【Zコード】

N9799C

### 【作者名】

寝村萬寺

### 【あらすじ】

クリームパンが欲しいので推理し始める学生のお話

(前書き)

あらすじ的には面白くなりそうだつたけど俺の文章力と推理根拠が  
いまいちかみ合いませんでした( ; )

彼がクリームパンをこれほど魅力的に感じたことは多分生きてきて初めてだろう。

朝食になにやらしょぼい菓子パンを食べて以降、大学でも何も食べなかつたし、実際自宅に向かうこの電車に乗るまで缶コーヒー以外は何も口にしていない。単に金欠のせいなのだが別にそれはこの話とは関係ない。

車両が揺れる中、はす向かいの男が電話で何事か喋っているのが聞こえる。

実際、田の前にはクリームパンがある。自分のクリームパンなら単に袋を開けて食べるだけでいいわけだが、さつき乗ってきた中年男の物な訳で勝手に奪い取れば窃盗だ。なんとかして、食べたいなあとぼんやり考えている。ここで一つの光明が射す。中年男はカバンの中から本を取り出した。その本は「失楽園」。この手のおっさんが不倫へと憧れを抱いているのはいつの時代でも変わらないのか、などととりとめのないことを思いながら、渡辺淳一に感謝し計画を行動に移すこととした。

「ねえ、すいませんけど、そのクリームパンくれませんか?」

と聞いてみた。彼の推理ではこれは断られる。このおっさんは相当に憎氣だ。

「別にケチってる訳じゃないが、売るんならまだしもタダでやるきにはならんね。」

けちなやつに限つてそういう事言うんだよ、と毒を吐きつつも内心ここまで彼の計画どおりである。

「じゃあ、不倫とか興味ないですか?」

無論だが若い男にこんなこといきなり言われたら怪訝な顔をするだろう。予想通りおっさんは怪訝な顔をして少し考えた後で

「「めんな、にいちやん。俺はそっちのケはねえんだ。」

と言つた。くそ、予想通り過ぎるだろ、このおっさん、俺だつてそんな趣味ねえよ、と思いながら

「ああ、いえいえ、そういうことではなくて。この車両に不倫カップルが乗ってるんですけど、そんな話に興味はないですか？」

こういふとおっさんは急に目を輝かせて辺りを見回し始める。オフシーズンの特急電車ではあるが終点が温泉地の駅なのでそれなりにカップルはいる。とはいえるカップル3組、あとはおばさん4人のグループと、中年男と彼の1~2人である。

ここで電車と車両内の説明をしておこう。電車は温泉地・城崎へと向かう特急列車の最終で、城崎着8時、途中停車駅はこの後城崎を含め3駅である。よって、おそらくおばさん4人グループは旅行帰りである。これは容易な推理でおばさん四人が8時から片田舎の温泉に行くと可能性より逆にバーゲンか何かに行つてきてその帰り道であると考えるのが順当である。問題はここから、男女のカップルは3人。

おっさんは凄い食いつきぶりで、三組のカップルを全て見回したあとで

「あの中年カップルだらう? 手を握り合つてゐ」と安っぽい推理を彼に披露したが

「いえ、残念ながら違います。一人はおそらく夫婦で最近結婚した所のようですね。彼らが愛し合つるのは自然なことですよ。でも言っておきますけど、そのクリームパンをくれない限りあと二組のどちらかを説明するわけには…」

おっさんは少し考え、そして仕方なさそうにクリームパンを彼に渡した。

「そのクリームパンを食つ前に説明しろ、俺が納得しなかつたらクリームパン返せよ。」

なんと言つかクリームパンを人にあげるのが嫌と言つよりは騙し止れるのが嫌なんだろう。プライドだけは随分と高いものだ。

「ええ、もちろんです。まず、さつきおっしゃった中年カップルで

すが、残念ながら二人とも結婚指輪をしています。それだけ十分な気がしますが、さらに言い足すと、彼らがお土産を持っていることです。つまりこれから行くのではなく、もうすでに行つた後で帰り道にもかかわらずペアリングをしている。ならば夫婦である可能性が最も高いわけです。」

と言つと

「指輪なんかこからじや見えないぞ」と文句をいつてきただが、実際に車両の端っこに座つた人の指輪を見るには視力が必要だ。

「僕はあの人たちが隣を通過した時に見ました。ちなみに全てのカップルについて観察してますよ」というと

「あんた、いつもそんなことしてるのか?」

と疑わしそうにこちらを見ている。仕方がないので

「そんなに疑わしいなら確認してください」と促した。実際にトイレに行くフリをして3カップルの指や身なりを確認してきた。

「あと一つの不倫カップルでないのは、あの若い女とおっさんの二人です。なぜなら…」

と言いかけた所でおっさんが

「ちょっとまて、じゃあ、あのどう見たって母と息子って感じのの一人が不倫だつて言つてんのか?」

「そうです。その前に若い女とおっさんはですね、」

と言つと、おっさんは

「それはどうでもいい。じゃなくて不倫の二人の話を聞かせてくれ。

」  
と言つ、かなり焦つてゐる模様だ。

「じゃあ、不倫カップルですが、まず引っかかつたのはおばさんの方が指輪をしていません。であると結婚していない、あるいは外している。外している理由はサイズが合わないとか普段は付けないの

だとかいろいろあります。もちろん中には不倫もありますがまだ可能性の一つでしかありません。ちなみに男のほうは、左手の薬指に指に指輪の日焼け跡があります。

だからなんだと言う顔でおっさんは釈然としない模様である。

「次に一人は一人とも車を持つています。車のキーは確認済みで、女はベンツで男はダイハツの軽自動車のようです。しかも、女のほうが2号線で渋滞が大変だったと話していました。一人が夫婦ならかなり不自然です。夫婦で旅行に行きたいなら車で行けばいいし、どうしても電車で行きたいなら一台の車で駅まで来たほうがお得です。と言うことは一人は夫婦ではない。おばさんは未婚あるいは既婚で、男は既婚であるが、一人は夫婦ではない。」

おっさんは小さく頷いた。

「ですが、息子が結婚後、母と旅行に行くと言つ可能性はまだ残されています。これを否定したのは一人の携帯電話でした。一人は携帯電話の電源を切つています。さつき電話がかかってきた時に、二人で電源オフにする所を見ました。一人が親子なら携帯電話の電源を切るのはおかしいでしょうから、普通に考えれば知られてはならない関係、つまり不倫カップルであると言つ結果に落ち着きます。」

おっさんは頷いて

「まあ、クリーミュパン一個分ぐらいの推理だな」と正直な感想を言った。

(後書き)

ぶつちやけ超イマイチです  
我ながら死ねばいいのに。  
ここをこいつすればいいとかあれば送つてへらさい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9799c/>

An amateur detective in the train

2010年10月17日04時41分発行